

とらべつ

歴史余話

第6回 獅子内動物群を探した頃

北海道教育大学札幌校 教授 鈴木 明彦

ししない
獅子内動物群といっても、町民の方には何のことかわからないであろう。動物群といっても、すでに絶滅してしまった化石動物群のことである。もう少し具体的にいうと、当別が海であった頃に棲んでいた貝の化石が主体のものである。この化石動物群を探して、獅子内周辺を何度も歩いていた。30年ほど前の大学院時代にさかのぼる。私が若手研究者だった頃とその研究成果を紹介したい。

北大の大学院生だった頃、博士論文をまとめる一環で、石狩・当別から江別・北広島まで、雪のない時期は地層のある山野を盛んに歩いていた。その時ご指導いただいたのが、北海道開拓記念館（現北海道博物館）のA博士であった。A博士は野外調査では動物的な感[？]があり、重要な地層や貴重な化石を知らぬ間に見つけてしまうのだ。当別を調査するなら、まずは獅子内だ！ということで、当時は獅子内神社周辺の沢を

ヤブこぎして、貴重な場所を教えていただいた。その時に採集したものが、保存の良い大量の貝化石である。その後さらに研究を進め、博物館の研究紀要に共著で公表した。

獅子内動物群は、材木沢層と呼ばれる第四紀更新世の地層に含まれている。この時代の地球は氷河時代に相当し、海進と海退が繰り返されていた。その頃、当別南部は海で、当時（およそ80万年前）は冷たい海流が流れていたと推定される。それを示すのが寒流系の貝化石（図1）や有孔虫化石（図2）である。これらは保存の良い貴重な化石である。様々な証拠に基づいて、この時代の古地理を復元してみると、今は海から多少離れている当別も、地質学的時間からみれば、海になったり、陸になったりを繰り返していたことになる。当別の崖に見られる一見地味な縞模様にも、こんな歴史が刻まれている。

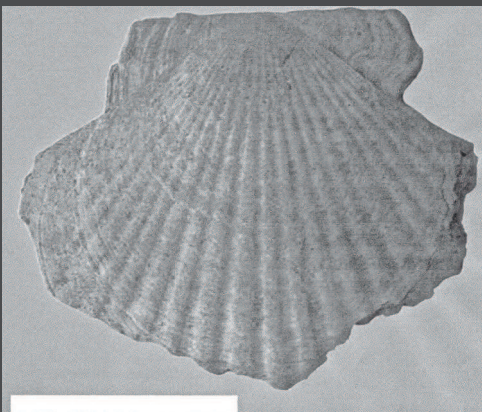


図1 貝化石（ホタテガイ）（スケールは5cm）



図2 有孔虫化石（エルフィディウム）（スケールは0.1mm）